

## シンポジウムを終えて

### ▼岡田 徹▼

今回のシンポジウムでは、西島建男さんから指摘のあった国家主導の教育改革、とりわけ知の学際化や総合化という形をとって現れる「専門基礎学の空洞化」や「知の技法化」が論議の一つの的になった。知の技法化やマニュアル化への傾斜は上からの圧力によるものであるのみならず、実は学生が潜在的にもっている欲求の一つの具象的な現れでもあり、その意味では下からの挑戦を受けているともいえる。それゆえ知の空洞化や技術化に抗するためには、上からと下からの二正面作戦を強いられていることになる。このことは何のために学ぶか、学んで何をするかといった自己と社会的世界の意味への問いを十分に見出せないまま、膨大な専門知の体系を一方的に押し付けられている学生の生理的な拒否反応であるといえないだろうか。幅広知識でも総合学でも何でもよいから、取っ付きやすく、わかりやすい、できればすぐ役立つ、マニュアル化した知識がほしい、と。むろんその反面、学生は寺崎先生の指摘にもあるように自己への問いや自己発見への強烈な希求も持ち合わせてもいる。

一見矛盾したものを合わせもっている学生へのはたらきかけとしては、栗原 彬先生が話されたように、学びの主体である学生への可能性に対する基本的信頼、根気強いみまもりが求められている。こちらの働きかけいかに

よっては、彼らの知的な関心は大いに触発喚起されるという手応えを、私も今年度全カ리를担当して感じている。その意味では学生像やその生態・気質を云々するまえに、大学・教師側の知の技術化・マニュアル化を防ぐ、自己自身の取り組み努力を強めることが求められている。知の技法化に抗するために、特に全カリにおいて知の体系的（広さ）と原理性（深さ）をかね備えた知を、いかに学生に呈示できるか、こちらの真価が問われているように、私には思える。

今ひとつは亀川先生が指摘している、全カリの展開により専門科目の1, 2年次化が進み、初歩的なものと高度なものを一緒に教えることになり、専門あるいは専門基礎学の空洞化や、全カリにおける入門的な知識のバラマキ状況をどうするかという大学・教員側の問題がある。この課題に応えるには、寺崎先生が指摘されている、学部の専門基礎教育をどうするか、とりわけ全カリと学部基礎教育との連携をどう図るか、全カリ改革のなかで手付かずのままになっているこの課題への取り組みが今後重要性を帯びてくる。これは専門学部のカリキュラム編成や個々の授業内容の再検討のみならず、全カリ側での重要な検討課題でもある。多くの学びに謝意を表したい。

(おかだ とおる 本学コミュニティ福祉学部教授 全カリ運営センター 広報・研究開発委員)

### ▼五十嵐 暁郎▼

重みのある発言があいついだシンポジウムだった。参加されなかった全カリ関係者や教職員は貴重なチャンスを逃した。そういう方たちに、この記録をぜひ読んでいただきたい。

今回のシンポジウムは全カリ実施以後の経験をふまえて、あらためて全カリの理念を問い直すことになった。また、「全カリと専門」とサブタイトルを付したが、「全カリ」は学生にとって、実際には大学での学問を学びはじめる重要な時期である1, 2年次を中心に、教育を担っているという意味で、きわめて重要なカリキュラムである。と同時に、実は専門教育を受けるときの学生が学問にたいしてどのような関心や姿勢を持つかは、ここで決まってしまうといっても過言ではない。その意味で、専門教育と全カリは相互にもっと強い関心を持つべきであるというのが、趣旨である。

現に、亀川教授が指摘されたように、全カリ導入に際しては、各学部では専門科目を1, 2年次に引き降ろすという、専門教育のレベルや性格を変えかねないような重要な変更をとまなっている。このことが引き起こすであろう「副作用」も見過すことができないだろう。一方、全カリについても、カリキュラムとしての体系性が十分には練り上げられていないことや、カルチャー・センター化や「オタク」化の危惧がのべられた。全カリ運営委員とし

ては思い当たるふしが少なくない。今後の大きな課題である。

シンポジウムでは、大学教育全体についても興味深い議論が展開された。煎じつめると、専門教育をおこなうという点で、大学は専門学校とどうちがうのか、道徳的、人格的な価値とどうかかわるのか、という問題である。言葉を替えれば、つねづね口にされる「リベラル・アーツ」とは何かという問題である。立教大学では、しばしばこの言葉が使われるにもかかわらず、大学組織としては必ずしもその意味をつきつめて考えたことがないのではないか。これも課題であり、次のシンポジウムのテーマの有力候補だと思う。

また、冒頭に西島氏が指摘されたように、近年、文部省が矢継早に打ち出している「改革」にたいして大学は、もっと主体的、批判的に受け止めることが必要であろう。文部省的な「改革」に振り回されている雰囲気が少ないから、立教らしい大学づくりということを、もっと積極的に考えるべきではないだろうか。その意味で、全カリのシステムの中にこのシンポジウムをはじめ、大学改革を考える場を設定されたことに敬服するとともに、この場をいっそう意義あるものにしなくてはならないと思った。

(いがらし あきお 本学法学部教授  
全カリ運営センター 広報・研究開発委員)